復活節第３主日礼拝説教　　2023年4月23日

「この町に留まれ」

ホセア書６章２節
二日の後、主は我々を生かし　三日目に、立ち上がらせてくださる。我々は御前に生きる。

ルカによる福音書24章36～49節
24:36 こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。
24:37 彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。
24:38 そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。
24:39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおり、わたしにはそれがある。」
24:40 こう言って、イエスは手と足をお見せになった。
24:41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。
24:42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、
24:43 イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。
24:44 イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」
24:45 そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、
24:46 言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。
24:47 また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、
24:48 あなたがたはこれらのことの証人となる。
24:49 わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」

①
　先週の木曜日、聖書研究祈祷会の後に私と妻とで上諏訪教会の永瀬克彦先生にご挨拶にお伺いしました。上諏訪教会の永瀬克彦先生と諏訪教会の橋本克彦先生ということで南信分区ではちょっとした話題になっているそうです。永瀬先生も同じ克彦の人に初めてお会いしたと言われていました。それは置いておいて、永瀬先生とお会いしてお話をし、先生には南信分区の事や諏訪地区のことなど色々と教えていいただきました。色々とお話をする中で永瀬先生は奥様との出会いの素敵なエピソードをお話して下さいました。このお話は今日の礼拝説教でお話をすることの許可を永瀬先生からいただいていますのでご安心ください。
　永瀬先生は東京神学大学で学ばれて、神学生時代は千葉県の松戸教会に出席し奉仕をされていました。本来であれば神学生最終学年になるはずが卒業に必要な単位の計算を間違

えて単位が足りずに留年をしてしまいました。先生は「ひどく怒られた」と言われていました。そして留年をしたその年の秋に後に奥様となる女性が松戸教会の礼拝に出席するようになりました。そして、卒業されて上諏訪教会に遣わされてからお付き合いが始まり結婚へと導かれたそうです。先生は「もし留年しなかったら妻と出会うことはありませんでしたし、上諏訪教会に遣わされたのも恵みです」とおっしゃっていました。留年をする、つまりはもう一年東京神学大学にまた松戸教会に留まる、そこに留ることを神様から命じられて留まったおかげで今の幸せがあり恵みがあるのです。永瀬先生にとってそこに留まること、そして備えの時を過ごすことが神様の御心でありまた必要な時だったのです。私はこのお話を聞いて神様のなさる業は人の思いをはるかに超えておられるなあと思いました。

②

週の初めの日、十字架の死から 3 日目に復活されたイエス様はエマオへの道でクレオパともう一人の弟子に現れて下さり、共に歩んで下さり聖書にご自身の事が証しされていることを熱く語ってくださり、さらには共に食事をしてくださいました。最初は復活されたイエス様だと分からなかった弟子たちですが食事を共にすることでイエス様だとわかりました。その瞬間にイエス様が見えなくなりました。復活されたイエス様に出会った喜びを二人は真っ暗な道をエルサレムへと急ぎました。するとそこには他の弟子たちが集まっており復活したイエス様がペトロに現れて下さったと、お互いに復活したイエス様に出会った喜びを分かち合っていました。

するとそこにイエス様が現われて「あなたがたに平和があるように」と言われました。弟子たちは復活されたイエス様に出会った喜びを分かち合っていたのですから、目の前にイエス様が現われて下さったのならより大きな喜びに包まれそうですが、現実は恐れおののき亡霊を見ているようにうろたえました。なんともコントのような場面ですが、それが弟子たち人間の弱さなのでしょう。イエス様はそれでも「わたしの手や足を見なさい。触ってよく見なさい」と手や足を見せて下さり目に見える形で触れることができる形で復活の証拠を見せて下さいました。しかし、それでも弟子たちは信じられずにいるので「何か食べるものがあるか」とお聞きになり、弟子たちが焼き魚を差し出すと目の前で食べて下さいました。

そして、「私についてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄」すなわち聖書に書いてある事柄は必ず全て実現すると言われました。さらにイエス様は聖書を悟らせるために弟子たちの心の目を開いて「あなたたちはエルサレムからはじめてあらゆる国の人々の主の復活の証人になる。」と言われました。イエス様の復活をなかなか信じることができなかった弟子たちをイエス様はご自身の復活の証し人として、主の復活を宣べ伝えるために豊かに用いて下さると言われるのです。

③

「行きなさい。すぐに行きなさい。」ご自身の復活をあの手この手を使って弟子たちに示して下さったイエス様ですから「すぐに行きなさい」と言われてもおかしくありませんし、むしろここまでの話の流れからするとそう言われる方が自然に思えます。

しかし、イエス様は弟子たちに言われます。49 節です。

「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまで

は、都にとどまっていなさい。」
　父が約束されたもの、高いところからの力、それは聖霊です。イエス様が弟子たちと共におられるときに「わたしが父なる神のもとに行くと神は聖霊をあなたたちに送って下さる」と言われていた聖霊です。その聖霊に覆われるまでは都に留まっていなさいと言われるのです。イエス様は「留まれ」と言われるのです。「行け」ではありません「留まれ」なのです。「なぜすぐに行かせてくれないのか」と思った弟子もいるかもしれません。イエス様はきちんと理由を示します「聖霊に覆われるまで」と。覆われるこの言葉の元の言葉は「着る」「身に着ける」という意味です。聖霊を着るのです。身に着けるのです。真冬の寒い中を暖かいコートやジャンバーを身につけずに外出はできません。それと同じように聖霊というコートやジャンバーを身に着けるまでは外に出るな。都、エルサレムの町に留まれ。今は聖霊というコートやジャンバーが手元にない。それを神が与えてくれるまではこの町に留まれ、この町に留まって今は待つのだと言われるのです。留まるということが神様の御心なのです。

④
　私たちは留まるということに対してどちらかというと消極的な印象を持ってしまいがちです。4 月に入り新年度が始まりました。新生活応援キャンペーンなど何か新しいことを始めることがいいことであり、そうでないとなにかどこか取り残されたような気がしてしまいます。3 月から 4 月になったけれども周りは新しいことを始めて環境も変わっているけれども、自分一人だけ昨日も一昨日もその前もいつもと変わらない日常を送っている、そんな変化がないいわば現状に留まっている自分の姿にどこか気後れしてしまうかもしれません。いや気後れだけならまだしも、いったいいつまでこのままでいなければいけないのだろうか、いつまで留まってこの歩みを続けなければならないのかと私たちは不安になり不満を漏らします。
　留まるということが自ら選んだことならまだしも留まらざるを得ない状況に追い込まれ、しかもその状況がいつまで続くかわからないのであれば私たちはその毎日になかなか希望を持つことができなくなってしまいます。「主よ、いつまでなのですか」「あなたの御心はどこにあるのですか」私たちはそのように神様に嘆きます。
　それは弟子たちも同じだったと思います。イエス様から「聖霊を身にまとうまでこの町に留まれ」と命じられた弟子たちもじゃあ具体的に神様はいつ聖霊を送って下さるのかはわからないのです。それが明日明後日ならまだしも 5 年後 10 年後かもしれません。いつになるかわからない約束を信じて留まって待ち続けることは大きな不安です。「主よ、いつまでなのですか」「すぐに行かせてください。」「なぜすぐ行かせてくださらないのですか」そのような嘆きの言葉や祈りの言葉も出たのではないかと思います。

⑤
　「聖霊を身にまとうまであなたたちはこの町に留まれ」それは「聖霊を身にまとわない今の状態で主の復活の証人としてこの町を出たらあなたたちは耐えられない。だからそれまで留まるのだ、今は備えの時なのだ。今の備えの時があなたたちにとって必要な時なのだ」そのようにイエス様は言われるのです。そして実際にペンテコステで聖霊が降り、聖霊を身にまとった弟子たちは力強く主の証し人として地の果てに至るまで宣べ伝えました。弟子たちにとって留まる時、備えの時が神様から与えられた必要な恵みの時だったのです。

留まる時、備えの時、その時もまた神様から与えられた恵みの時であると私たちはなかなか思えないのが現実です。でもその時が私たちの歩みにおいて必要だから神様は私たちに留まることを命じてその時を与えて下さり、また備えの時を与えて下さるのです。たとえ私たちはその時が必要な時でありその時もまた恵みの時であると思えなくても、神様は神様のご計画があり、そのご計画によって私たちを導いて下さるのです。そして振り返った時にあの留まる時も備えの時もまた神様から与えられた恵みの時であることがわかるようになるのです。神様は私たちの思いをはるかに超えた恵みに満ちたお方です。